

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第142回

「あいだ」の哲学に向けて くもの巣の「穴」 をねらう：人文知の再定義と復権のために 藝術行為再考に向けた、暫定的な覚え書き（下）

稲賀 繁美

（いなが しげみ／国際日本文化研究センター，総合研究大学院大学教授，放送大学客員教授）

8. 武術における「無」と「中」

規則の論理から脱した世界では、勝敗もまた、常識的な理解とは異なった様相を帯びる。なにより競技試合の場では、敵に「うまく技をかけてやろう」といった意思や感情がどうしても働く。それはさしあたっての試合の駆け引きでは有効だろうが、その対価として心に「乱れ」を招く。このため本来の「上達」のためには、結局のところ、克服すべき最後のもっとも厄介な障害となる。それを実体験として身心で悟るために、「稽古」が必要となる。この境地では、「先読み」や「警戒」はかえって足枷となる。「今来るか、今来るか」と相手の攻撃に構えるのではなく「ああ来たか」と読み替える——あたかも期待していた事態がようやく到来したかのように。つまり、迫り来る脅威を「待ち構える」ことで（何の利益もない）不安や緊張を徒らに亢進させる代わりに、「結果」を事前にそれで良しと織り込んでしまうことで、心理的な時間軸をずらしてしまう。あるいは因果を捻転させる。こうした転換は、いわばメビウスの帯の裏側へと潜り込むこと

に類比できようが、そうすることで、状況に吞み込まれることなく、状況を吞み込んでしまう。理屈でいえば「発想の転換」だが、これを心身の深部に根付かせることが稽古の一環となる。

武術とは語源からして「来た」戈を止める技術であり、暴力や支配力を無化させる技能を指す。それは相手との駆け引きで自己に有利な立場を確保しようとする姿勢とは異なる。「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」とは、武術の世界でよく引かれる格言である。一見、自殺行為を推奨するように聞こえ、論理的に無理筋だ、といった批判も向けられる。だが身を捨てない限り見えてこない次元があることも、体験的に否定し難い。「自らを無にする」などと言うと、宗教的な悟りと混同されかねまい。だが「身を隠す」とか「災いを避ける」といった「自己」に囚われる限界を超えるには、「自らを無にする」としか形容の仕方がなく、「自らが無」となることで周囲の世界に溶け込むと、その場の流れに逆らうことなく自らの意思が達成される。これはもはや「主体の意思」でも「周囲からの強

要」でもない。

だが「自己消滅」が達成された場合、その結果として発生した事態を、なおその自己の「意思」と呼べるだろうか。この境地はもはや、運命に抗い、周囲との闘争によって優位を勝ち取るといった発想とは、無縁となる。社会革命など目指さない限りで、それは体制順応の受け身の姿勢、と指弾される場合もあろう。

「人事を尽くし天命に待つ」というが、これは迷信同様の神頼みや願掛けなどではなく、方条遼雨の適切な表現を借りるなら、『『必然』がやってくる『通路』を邪魔しない』(方条:112)と言い直してもよい。その「必然」が善悪の彼岸に在るのか否かは、それこそ人知を超えている、と認めるほかなかるうが。

「意識」を超えた動きを「獲得する」——というとすでに形容矛盾となるので、そうした自己を超えた動きが自ずと生まれる場に己が身体を「提供する」、「投げ出す」、あるいは心身を「捧げる」——とでも表現すべきだろうか。具体例として、他者から攻撃を受けているという意識を、卑近な「いじめ」の場合で考えよう。被害者が自分は「いじめられている」と意識すれば、それが「いじめ役」にとっては格好の標的となり、かえって陰湿な「いじめ」がさらに亢進する。そこで無理して我慢し、知らんぷりを決め込んでも、そんな演技はあっけなく見透かされて、かえって突っ込まれる。自己が不当な扱いを受けている、といった正義感は、残念なことに、それだけでは逆効果となる。とすれば、どうすればよいのか。実際に「いじめ」が無効で、効を奏しないと相手に分かって初めて、「いじめ」は自壊する(方条:239-240)。すなわち「攻撃」

を中和し、無化する工夫が、ここで肝要になる。

「いじめられている」という意識を捨てさえすれば、「いじめ」は成立しない。甲野善紀は、このような割り切った主張をする。「我があるから敵がある。我がなければ敵はない」。こう言われても、そんな理想論だ、理屈に過ぎぬ。実際に発生している「いじめ」を容認するのか、といった反論もでてくるだろう。だがこれは主客という関係そのものを消去する場を設けるという発想の転換でもある。論理の世界からテトラ・レンマの世界への住み替え、といってもよい。

もちろん容易に実現できることではない。「悟れ」ばそれで達成できるならば、苦勞はしない。だが長年にわたっての稽古の末に、これがふと腑に落ちる。

こうした場合、「いじめられる」自分をどこからか、まるで他人のように見つめる「もうひとりの自分」が立ち現れる。「離見の見」などともいわれるが、「我ならざる我」がそっと寄り添ってくる。第二次世界大戦で日本軍の捕虜収容所から無事に生還した経験をもつ、南アフリカ出身の作家、ローレンス・ヴァン・デル・ポストLaurens van der Postは、詩人のエリオットT.S.Eliotの詩から、これを言い表すのに"Yet being someone Other"という表現を借りている。致命的な状況で、「いじめ」が無力化する「不思議」な奇跡を体験した究極的直観だろうが、あるいはこれが古人の語った「天命」の顯れなのかもしれない。

それは一種の「離人症」に近い感覚だが、空っぽになった自己という器に世界がすっぽりと収まってしまえば、そこには原理的にいつて「敵」は存在しえない。

あるいは「敵」は世界全体を「敵に回す」ため、おのずから自滅する。——そうした境地に置かれたとき、身体は（一瞬であれ）、通常の形容とは異なった質の「自由」を（運動能力や運動神経の優劣とは関係なく）知らぬうちに体現している。レンマの理屈でいえば、このとき、自分と敵とは自分でもあれば敵でもあるという「背反」を「Aかつ非A」という相互融合のなかで生きており、また両者は「Aでも非Aでもない」という、個々の人格の自己同一性を超えた、無人称の「空」の「道」に佇んでいる。それは社会的規範が設けた試合の規則にそった勝敗などには、もはや拘らない、いわば別格の「自由」である。だがこの境地は、西欧近代世界が発達させてきた「個人」に帰される道徳的責任感とは、きわめて相性が悪い。

9. 「自由」と「束縛」の彼岸へ

中沢新一『レンマ学』、中動態をめぐる近年の議論などを手掛かりに、論理的思考の常識に潜む病弊を摘出してきた。こうした論点を、本論の最後に、津田一郎が『心はすべて数学である』で展開した、きわめて鋭利な見取り図へと、接続してみたい*44。

過度な単純化を恐れずに要約しよう。ロゴス的な思考を発達させたのが前頭葉ならば、レンマ的思考を司ってきたのは海馬、といえる（津田：34-35、188以下）。体験は記憶と化すが、記憶には短期と長期の違いがある。短期記憶は海馬がなければ保持されず、海馬を媒介に数年の年月をかけて脳内を経巡って加工された末、長期記憶として側頭葉に蓄積———というか、むしろ浮遊状態で「溶け込ま」される。

津田はこの過程で偶有性 contingency（津田：124、135）の裡にカオス理論と同形の「遍歴」回路が発現し、この回路が「想起」を探索するのだが、「記憶」と呼ばれるものは、その「想起」の都度、この回路のなかに発現する、との立場をとる（津田：122）。この津田の仮説は、奇しくもかつて哲学者の大森荘蔵が『流れと淀み』などで唱えた過去の「立ち現れ」説とも遙かに共鳴するが、いきなりこう述べたのでは唐突すぎて、理解の妨げとなるだろう。すこし解きほぐして説明したい。

まずヒトの前頭葉だが、この部位には、因果関係を無理に「捏造」してでも固定して定着させようとする「論理」偏向の傾向があり、ひいてはこれも記憶間違いの遠因となる。元来、因果とは無縁な事柄の羅列としての「エピソード記憶」は、適当な単位ごとに区切られ、蛇腹のように折り畳まれて収納される（津田：180、186）。そこでは、理屈っぽい因果関係など、まだあえて問われないが、ひとまとまりの「エピソード」は、なぜか丸ごとそのまま思い出せる。これは暗唱した歌の歌詞や詩を想起すると実感できるところだろう。この「畳み込み」の仕掛けは、先述のドゥルーズがその著作『襞』で縷々展開した話題だった。この哲学者は、大脳皮質に刻まれる「襞」にこそ精神が宿る、との大胆な説を述べたが、その生理学的な裏付けが、ようやく近年の脳科学によって得られたといつてよい。

こうした思索を、生理学的にも裏付けするのが数学だ。そんな一風飛躍した推論が、津田一郎の発想の特徴となる。この著者によれば、数学の抽象的思考こそが、ヒトの脳の生理学的な機構の表現様態なのだから。ここで、すでに本論冒頭で述べ

たカントール集合と同様の機構が、頭脳の働きを端的に説明するのだ、という（津田:188）。カントールの集合論は、有限な領域に無限集合を圧縮することを許す数学的操作だが、これは『華嚴經』の、一見すれば荒唐無稽とも誤解されかねない数値の羅列のうちに、数理的にも見事に記述されていた（中沢:391）。この集合論は、映像的にはフラクタル構造を取る。具体的には、たとえば正三角形に内接する逆正三角形を描き、それを無限回繰り返すシェルピンスキーのギャスケット■図1（津田:166-167）と相同である。それが、無限を有限に封じ込める知的操作に相当する。記憶の台座は、脳内の特定の記憶担当部署に分類して堆積されるというよりは、むしろ一方では海馬を介した散在系における想起の連携と、他方ではエピソード記憶のフラクタル的圧縮術と同系の仕組みとに立脚し、それら両者を併用しているらしい。

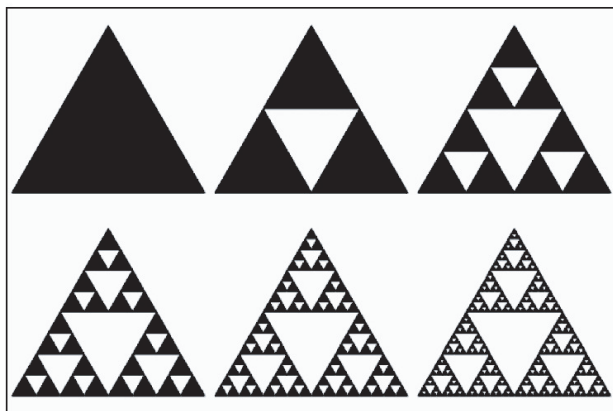
さて、短期記憶を司る媒介部署が海馬らしいとの推測に触れたが、この海馬の構造は、爬虫類と哺乳類では大きく異なるという。どうやら哺乳類ではじめて、連想が可能となる（津田:192）。「連想」は

過去未来や遠近といった時空を無碍自在に結びつける。これに対して「推論」は、因果関係の仮説構築や同類の経験との比較検証によって漸進的に組み立てられる。

（この推論過程はブール代数の演算過程と相同であると津田は主張するが、この点には後にふたたび戻って検討を加えたい）。連想や推論は、ともに大脳皮質におけるシナプス結合を促進するが、そのシナプス結合をいわば一種の「処方箋」や「格言」として「論理的」に定式化して固定するのが、とりわけ前頭葉の得意技となる。これに対して、「連想」のほうは、むしろテトラ・レンマ的な融通無碍で「非論理的」な結合を旨とする。通俗的には前者の因果論的論理思考が「左脳」、後者がテトラ・レンマ的な「右脳」の役割、と喧伝されたこともあるが、ここでの「右脳」「左脳」はあくまで比喻的理解に止まるだろう。

10. 刹那の賦活と「創造主」の起源

ところでシナプスが発火するには電位差が必要であり、電位差を確保するには、コンマ数秒の遅延を要する（津田:31, 42）。その間隙ごとに信号は断片化している。つまり微分と同様の操作が脳神経系では



■図1 シェルピンスキーのガスケット

不可避であり、その断片的な信号があたかも連続した過程のように意識されるのは、優れて知覚上の錯覚と、それに経験的保障を与える体感とのお陰である。実際、この錯覚が失われた純粹知覚の世界で日常生活を営むことは、不可能だろう。なぜなら、時間感覚に限っても、純粹知覚の世界では、一瞬前の自分が次の瞬間の自分と連続しているという慣性的安定感覚が途絶するからである。その逆が、今の自分を過去の自分の再来と捉える、かの永劫回帰、輪廻転生の「幻想」の起源だろう (cf. 津田：203)。

日常生活で「現実」だと思い込んでいる事態の正体は、このあたりで、すこしばかり詳らかになる。すなわち「安定した現実」とみえる風景は、実際には遠くから見る滝のようなものだ、という比喻である。滝とは、その構成要素となる水は刻一刻と転変し、入れ替わっていながらも、滝としては同一の形態を保つ。時間の流れのなかで保たれる「自己同一性」とは、こうした水流、落下しつつ永劫に続く瀑布の感覚に近い (津田:131)。

この瀑布の比喻そのものも、華嚴教学に見られる比喻であり、鴨長明のあまりに有名な「行く川の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」も、このひとつの変奏だろう。そして通常の意識状態にあっては、この永続感覚の「錯覚」が、幸いなことにも「正気」を支える。「正気」こそが「虚構」なのであって、さもなくば、世界は時間においても空間においても切れ切れの知覚断片へと破碎し、散乱してしまい、もはや正気を繋ぎとめる便が見当たらなくなる。まさにまやかしの虚構としての「統合」^{よすが} integrityが喪われる。この危機を回避して、世界と自

己意識との破綻を調整する機関として働くのが、小脳と大脳を繋ぐ整流装置、すなわち海馬の役割となる。微分された瞬時の断片的集積を「幅のある時間」(津田：198)という連続性へと誤魔化す「ペテン」、いいかえれば「虚構」だが、どうやらこの「虚構」の精妙な仕組みに「意識」と呼ばれているものの謎も潜む。

武術における身心技法とは、こうした意識の生理的ペテンの際に探りを入れる技法となる。だがペテンの裏を搔く駆け引きに熱中すると、敵対者との果てしない化かしあいの悪循環に陥る。それは錯覚を利用して相手を騙す手管ともなりえ、「先を取る」のではなく逆に「後の先」を制するタイミングとか、相手の予想できぬ方向に体を躲すトリック、相手の触覚を偽って気配を消す自己消去の隠遁術、さらにはわざと自らの体を捨てることで相手の姿勢を崩す技法や、偽りの隙を与えて相手の攻撃を誘うフェイントの誘導など、競技スポーツの世界でも、駆け引きのうえでの戦術や戦略として語られる策術は少なくない。

だがこうした競技上の相互弁証法は、テトラ・レンマの「理路」からみれば、なお低次元の「邪道」だろう。むしろ身心と一体な脳の機能の錯覚が作り出す盲点を、それとして体得しつつ、相手に「そこに空隙がありますよ」と指摘して相互の境地を高めるような鍛錬、関節外しとその際限ない刷新・再身体化が、身体技法追求がもたらす醍醐味だろう。

さらに、ここまでくれば、推論結果を絶対視する大脳前頭葉の働きから、全能の「創造主」幻想が生まれたことも、ブール代数を利用すれば、数学的に確証できる (津田：152, 198-201)。

単純にいうならば、脳が確信を得るためには「同一」と見做される数値の「反復」が必要となる。「反復」がかけ算の累積と定義できるものであるならば、0と1との間の数値はかけ算を繰り返すにつれて、漸進的に減衰し0へと無限に近づいてゆく。反対に究極の「1」とは、もとより到達できない幻影であり、真実は「0」へと無限に収斂してゆく。

この場ではなお十分な論証を展開できないが、こうした津田の議論を踏まえるならば、小坂井の言う悪しき「創造主」とはブール代数の「1」、國分の探す「善」としての「神」とは「0」の心的表象となる。即ちここで「1」とは存在実体の「有」の幻想であり（西洋哲学での「存在」とは究極的には創造主たる「神」に帰着する）、「0」とは、到達不能ゆえに万物の根拠を基礎付ける「無」。そしてその（0から1の）両者の狭間で漸近線の動揺を営みつつ、やがて「ゼロ」の近傍へと無限接近するのが「生」の姿、ということになる。それはシナプスが必要な電位差を確保する一瞬一瞬毎に「輪廻転生」を「反復」しつつ「賦活」する。そしてこの1と0との間隙がlogosたるmoral「1」（以前の「道德律」と、lemma即ち「0」

へと収束する「倫理」ethica（以後）との振幅の心的表現、「唯一神＝創造主」の不在の幻影：「1」と、もとより把握不可能な「もの自体」Ding an sich：「0」との表裏をなす。

最期に一言。津田は、「他者によって自己が出来ているようなメカニズム」として脳を捉える（津田：115）。自我の形成とは、つまるところ、両親や先行する社会、ひいては先祖から引き継いだ無数の記憶が、外部からの働きかけの総和として、あらたな個体とその脳髄に作用し、「自我」と呼ばれるものも、この成長過程で徐々に達成されるからである。言い換えれば、集合的な心を、それぞれの脳が「自分の心」へと変換（津田：55）している、と見る立場である。思えばこれは、小泉八雲ことラフカディオ・ハーンが、日本人の心を記述するのに、無名となった先祖の霊の集合体としてそれを描いた様を彷彿とさせる。この想念は、輪廻転生や永劫回帰に、またひとつ別次元で、あらたな理解を与える切っ掛けともなるだろう。だがそれについての考察は、また別の機会に委ねたい*45。

【註】

*44 津田一郎の『心はすべて数学である』（文藝春秋、2015年）。また兼本浩祐『なぜ私は一続きの私であるのか』（講談社選書メチエ、2018年）も参照して得る所があった。以下本文（ ）内は津田著の該当頁数。

*45 参考として、稲賀繁美「『耳』『聲』『霊』—無意識的記憶と魂の連鎖について」山中由里子（編）『この世のキワ（自然）の内と外』（勉誠出版、2019年）249-260頁、「『のっぺらぼう』への誘惑—集合霊の憑依と無名性への夢」『図書』（岩波書店、2019年12月号）18-23頁などにいくつか試論を展開している。

*本稿の想念は一挙に到来した。偶然的配剤というべきだが、その集積の背後には旧師の急逝と、それに伴う非常事態があった。逝去によって齎された「空」が、それなくしては収斂しえなかった様々な情報を圧縮し、その転移が筆者の意識へと齎らされた。芳賀徹Haga Tore共著Continuité et avant-garde au Japon (1962)の華嚴解釈は、父君・幸四郎の書架にあった数学者・未綱愼一『華嚴経の世界』（春秋社、1957）に負ったものという。この証言を、逝去直前の2019年11月末に芳賀氏より直接得たことを付言する。2020年3月-4月執筆。